

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —



2005年8月6日
(雨水の日)
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 15号



今号の目次

- 上の原「入会の森」看板の設置なる/事務局・・・1
- 現地事務所兼宿泊棟がオープン/事務局・・・2
- 特集：地域資源調査レポート
 - 明川集落自然系レポート/海老沢秀夫・・・2
 - 明川は宝の山だった/清水英毅・・・3
 - 古道探索：青木沢峠の道/川端英雄・・・5
- 特別寄稿/夏野深晴
 - 森林塾青水フィールド・ステイに参加して・・・6
- 葉留日野山荘の思い出
 - /川上ゆう子・高橋志津子・・・10
- 麗澤中「奥利根水源の森フィールドワーク」報告
 - /湯本信康・・・10
- 第5回フィールド・ステイのご案内・・・11
- 編集後記 - 塾長のつばやき -・・・11

上の原「入会の森」看板の設置なる!!

事務局

構想2年有余。フィールドの広場正面に、森林コモンズ村・ふじわらの旗印ともいべき案内看板が設置されました。時は6月18日。塾生と講座受講生、応援にかけつけてくれた地元ならびに町職員の皆さんなど約20人が共同して設置作業に参加、写真にみるような立派な案内看板が立ち上がりました。

看板の製作者は地元が誇る木工家・水上工房の広川義直氏(=当塾・塾頭)。これ迄の木工歴20年のなかで一番力のいった作品でした、とご本人がおっしゃる手彫り彫刻加工の大作。材は地元産のヒバとヒノキ。中でも、屋根を支え豪雪の加重を分散させる蟄股(カエルマタ)と虹梁(コウリョウ)は湯の小屋産で樹齢なんと200年!文言は(右記)幹事会で草案を練りあげ、町当局との合意と地元古老の皆さんのご了解を得て決定されました。地形図は等高線が入った立体模型になっています。未だの皆さんも、是非いちどご覧になって下さい。

文言の発信者は、塾が町より旧入会地の管理を受託しているので塾と町の連名に。又、発信日付は管理委託契約の締結日=平成15年4月1日となった次第です。

ふと、思いました。蟄股のカエルは上の原の森の精ははそ
=モリアオガエルかな、なんて。去年も今年も柞の泉のあたりで見かけましたね。そして、虹梁のニジは草原の空にかかる連帯の虹かな、などとも。

塾が発足して5年。そして、「入会慣行を考える集

い」から3年たった節目の年に、「新しい入会地」にふさわしい「新しい旗」が立ちました。この旗のもとに、より一層の上下流住民の交流をはかりつつ、地元・町当局・都市住民が三位一体となった新しい入会地の仕組み(=コモンズの利用ルール)づくりを更に深掘りしていきたいものです。(清水)

当地はかつて地元の皆さんの入会山でした。今は森林塾青水が町から借り受け、新しい「入会の森」として守り活かすべく管理しています

平成15年4月1日 森林塾青水・水上町



ご家族、お友達とご利用下さい

愛称募集中です

土間つき 6 畳で水道ガスの他に、ミニキッチン、トイレ、風呂、座布団があります。(但し；寝具はありません)

利用方法、ルールは以下のとおりです。

- 1) 利用できる人 = 会員とその家族・友人の計 4 ~ 5 名
- 2) 利用手続き = 利用日の 1 週間前までに事務局に申請 (利用日・人数等、tel 可)
- 3) 利用可能日数 = 原則； 2 泊 3 日
- 4) 利用可能な設備・備品
上記諸設備 倉庫内の机、机、机、等 熊鈴、図鑑、等
- 5) 約束事 = 火の始末完璧に(喫煙可) 使用後、簡単な清掃とゴミ持ち帰り 使用備品と鍵は必ず所定場所へ返却
- 6) 利用料 = 500 円/人/泊 (宿泊名簿に記入の上、部屋の貯金箱に現金入金してください) 休憩のみは無料です



特集：地域資源調査レポート

明川集落自然・風景系レポート

海老沢秀夫

1. 水系...明川集落の骨格

明川は、四方を山に囲まれた細長い平地上に成立した集落。アナグマと呼ばれる上流の水源地から流れ出した 4 本の水系が集落内を流れ、明川の風景の骨格をなしている。この水が農業用水、生活用水として明川を支えてきたが、その重要性は今も変わらない。流れはかつてイワナが獲れるほど自然なものだったが、今では管理しやすい U 字溝の真っ直ぐな水路になっている。

2. マメザクラの墓...明川集落のランドマーク

明川集落のランドマーク。直径 10 メートル、高さ 4 メートルほどのマウンドで、鈴木さんという方が管理するお墓になっている。中央にはマメザクラ(カスミザクラ)が植えられている。



3. 水を張った田んぼ...ウェットランド

大坪祥一さんが平成 2 年から始めた 4 枚の転作田。動機は「昔の明川の風景を取り戻したかった」。水を張った田は、今では立派な「湿地」に成長し、コナギ、



ヨシ、ミソハギなどの湿性植物が生えている。水の中にはタニシもいる。調査当日、エゾイトトンボ(多葉田さんによる)が交尾行動をしていた。これも豊富な水があるからこそこのウェットランドだが、放棄水田の管理手法として注目される。

(転作田の生き物：大坪氏からの聞き取りを含む)

ギンヤンマ、エゾイトトンボ、シオカラトンボ、ヒル、タニシ、ドジョウ、ゲンゴロウ、ホタル、シュレーゲルアオガエル、オシドリなど (転作田の植物) ヨシ、ノハナショウブ、コナギ、ミソハギ、ヒシ、ウキクサ、ヒルムシロ、サワオグルマなど

4. 大坪家の奥津城...神道式のお墓

奥津城は墓の意味。シャクヤク、ヤマツツジ、ヤマウドなどが植えられ、ウスバシロチョウがふわりと飛ぶ、おおらかな墓。空間が広々としているのは、かつて土葬だったからか。

5. 明川のビューポイント...集落は小宇宙

細長い明川集落を遠望できる場所は、やはり上流部。大坪家のお墓の近くはそのひとつ。明川が、四方を山に囲まれた小宇宙のような存在であることがよくわかる。



6. 簡易水道...豊かな水を使って

山裾に「明川水利組合」が管理する貯水槽がある。奈良俣ダム建設に伴う助成で作られた。現在、年 7,500 円の組合費で維持される。水源は、標高 800 メートル地点のクマアナ。

7. 榛名神社...集落上流部山裾にあるシンボル施設

貯水槽の先に榛名神社が祀られている。周辺に林齢 40 ~ 50 年のカラマツの人工林がある。「父の代に植えたが、まだ切って販売したことはない」と所有者の大坪義一さん。さらに奥には、榛名神社「奥の院」がある。大沢集落と明川集落の管理のようだ。榛名神社は、水源のアナクマとともに、明川集落空間の扇の要の位置にある。

8. 寺山街道...石仏のある道

かつての集落道。北向き斜面なので、ブナが生えるしっとりとした林相になっている。石仏もあり、少し刈り払えばいい道になる。

9. 屋敷前の「洗い場」

簡易水道の貯水槽から流れてくる水をいったんせき止めた「洗い場」。流しっぱなしである。明川の水の風景のひとつ。



10. 氏神とお稲荷さん

...信仰の風景

屋敷の裏山に「氏神」と「稲荷神社」の祠がある。氏神の祠は、明川に2戸ある大坪家が祀っている。稲荷の祠は、各家にひとつある。屋敷の



裏山の祠は、表からは見えないが、明川の人たちを、心の奥底で支えている。集落全体の裏山にある榛名神社とともに、明川の信仰の風景は二重構造になっている。

11. 田舎家のガーデニング...生活の風景

ムシトリナデシコやアイリス類など、なつかしい草花がおおざっぱに植えられている。家の横にはギョウジャニンニクやオオバギボウシなど山菜類の畑も。民家の庭はおもしろい。住んでいる人が許すなら、各家の庭巡りは素敵なミニ・エコツアーとなる。



明川は宝の山だった (明川集落地域文化・歴史系レポート)

清水英毅

対象地：明川集落 実施日：2005年6月20日
参加者：13名 地元案内人：大坪義一氏

1. 明川は宝の山だった

— 小さいけれど、エコミュージアムそのもの —

正直爺さん杖ついて、昔の道を歩むたびきらきら光る宝石ザックザク！

明川は一見何の変哲もない山あいの小さな集落に過ぎないが、見る人が見ればそれ自体が「地域丸ごと博物館」だった。

見るだけではなく、触れても、匂いをかいでも、抱きついてよい展示物(=サテライト)がいっぱい。サテライトの間をつなぐ里道=エコ・トレールも現存。すこし手を加えれば即、利用可。

地元生まれのふるさとを愛する古老の学芸員さん・大坪義一館長ご夫妻が守る「郷土館」というコアセンター的施設もすでにあり！

2. 明川の宝物(地域資源)のかずかず

- すべてを記載しきれないが、気づいたものだけを -

1) 景観/風景

明川の風景はどこから眺めても心がなごみ、やすらぐ。特に、集落入口(寺山街道の起点)から元共同墓地に咲くヤマザクラを見下ろす眺めは、ま



さに日本人の(奥里山の)心の原風景。バックには夏でも雪を抱く朝日岳。5月の桜から秋の紅葉、はたまた一面の雪景色と、郷土館の縁側からの眺望はまさに天下一品！

2) 古道

寺山街道 江戸時代からの集落間を結ぶ生活道。子どもたちが朝夕学校に通った思い出の道。いまは通る人もいないが、昔を偲ぶ石仏群が道筋にゴオ～ロゴロ。

畦道 むかし棚田と棚田の仕切りをかねたあぜ道。沢からひいた冷たい水を高きから低き田に順に流して温度調整して作ったお米。いまはお米の代わりにコスモスやミソハギなどの景観作物や草刈などの作業用に使われている。

3) 水

川 水源は800mほど先の山中、通称「熊穴(クマナ)」。いまも熊穴周辺では、山菜採りに入るとクマさんにしょっちゅう出会うという。そこから四通する流れの本流が集落の真ん中(郷土館の裏)を流れている。昔は尺岩魚がたくさん釣れた清流で、水温は夏でも11～12。

U字溝 その名もゆかしい明川(アガリ)が、集落を流れるあたりは昭和55年ごろの土地改良とやらで何とU字溝に！U字溝は側壁が崩れない、流れが滞らないなど便利で必要性もあったが、情緒と自然を失くしてしまった。集落のくらしの歴史を物語る存在。



沢水 集落の田んぼには、山から湧いた沢水を引いていた。今も、一部のところでは、昔そのままの側溝を自然の流れが景観作物用の畑やビオトープ田んぼに引かれている。隣接の

森に近いところにモリアオガエルが産卵。ホタルも群舞する！水に手をつけると、上の田や水路の方が水温の冷たいのがわかる。

井 堰 集落の家々の道端に、流れを堰き止めて貯める枡(ヌ)。今も現役で、大根・菜っ葉・漬物桶の他、農機具も洗ったりする。除雪した雪を早く溶かすためにも大活躍。沢水を引いた簡易水道の蛇口もあって、手を口に当てて飲むと抜群の味。

4) 人 財

中島 享さん：「翌檜(アノ)山荘」のご主人昔は強力(ゴウキ)と言われた荷役夫さん。若かりし頃は材木や炭を木馬(キマ)に積んで一人で引いた。ダムを試掘調査関係の運搬でも大活躍した。地域の歴史を物語る、生きた化石。「俺の仕事は俺一代」の藤原七人衆のお一人。民宿の方は、今はお休み。

大坪義一(ヨシカ)さん (68 才)

ご存知「郷土館」館主にて、名物「大根仙人」の創作者。

館内にはふる里の暮らしの歴史を物語る農機具、生活

雑貨、写真や絵葉書等が文字通り所狭しと陳列されている。いつもニコニコ、夫唱婦随の見本みたいな とも夫人 とともに年中無休、「郷土館」を守る藤原一の文化人。氏も又、「俺の仕事は俺一代」の七人衆のお一人。

大坪祥一さん：田んぼピオトープの主。

昭和の終りまで東京で学校の先生。ふる里に帰って、荒れ果てて見る影もなくなってしまう田んぼを眼の前にして愕然。一念発起して、米作りはやらないまでも、幼かりし頃の豊かな自然を取り戻そうと取り組み始めて 15 年。4 枚の棚田に、ドジョウにタニシ、カエル。それを食べるヘビ。またそれを狙うトンビが空に舞う。森に近いあたりにはモリアオガエルが。チョウやトンボの数々はもとより、7 月の下旬 1 週間ぐらひはホタルも群舞するようになったと。「5 年で(復元の)兆しが、10 年で形になって表れ始めた」とのお話が印象的だった。

5) 建造物など

双体道祖神 大沢、大芦方面と関が原、山口方面への道の分岐点に十二神様(ジュウニカミ)とおぼしき石祠と並んで立つ。昔から集落を結ぶ生活道の道標(ミシルバ)だったのであろう。

大坪家の墓 墓石には「奥津城」とあるのみの神式墓地。初代・定右衛門の没年は安永 9 年(西暦 1780 年。



10 代家治將軍のころ) 神葬祭ゆえ俗名のみで戒名はないとのお話。昭和の 30 年代まで土葬であった由。

道祖神 寺山街道の入り口にある。

寺山街道の石仏群 寺山街道の道端に立ち上りしるやら、ねそべっていらしるやら。

水利組合施設

寺山街道からちょっと外れた山あいにあるコンクリート製の貯水タンク。

「明川簡易水道 昭和 57 年 1 月 水

上町」と表示板に。奈良俣ダム建設協力の見合いに出来たらしい。貯水量 50 トン。1 戸あたり年 7500 円で水道法上最低限の塩素消毒をしたおいしい水が飲み放題、使い放題の由。

榛名神社と奥の院

水利組合施設の先に古びた鳥居があって、その先の小高いところに榛名神社が鎮座。屋根はトタン葺きだが、中に入って見上げ

ると屋根の裏側は茅葺きだった。屋根の上部にデンデン太鼓の雷印がある。榛名詣で知られた神社の末社のひとつで、祭神は山神、水神、雷神の類と推察される。

奥宮は榛名神社の奥の急斜面を 10m ほど登ったところに位置していて、明川と隣の大沢集落の寄進になる石祠がポツンと立っている。水源の山を共同利用する集落の人々が、祭事もまた同じくしていた様子うかがえる。足元を見ると落葉の陰にギンリョウソウがひっそりと。まるで、鎮守の森の精。その隣にはきれいな橙色のツツジ。「この辺じゃ田植えツツジって言うや」当社の例祭は曜日にかかわらず 5 月 18 日の由。そういえば田植えの頃。

電気柵 (地元ではデンサクと呼んでいる)

明川に限らず、昨年あたりから藤原地区の畑でよく見られるようになった、網状の囲い。高さおよそ 2m。有害獣から作物を

守る目的で、国の「田園自然環境保全整備事業」に適合すると総費用の 9 割の補助金(上限なし)が出るという。平成 15 年からはじまったこの制度、他の町村では鹿や猪対策が主の由。ヒトよりサル人口(?)の方が多と言われる当地では、もっぱら猿対策用。義一さん曰く。「最大集団(40 頭くらい)のボス猿が死んだ



らしくて、今年は猿はあまり来なかった。いづれにしても、鳥獣との共生に悩む現代日本の中山間地の象徴的なモノと言えよう。

6)日本のビオトープの草分け = 田んぼビオトープ (大自然・生態系復元モデル)

明川集落の上から下に縦長に続く4枚の元・湿田に再現された、田んぼビオトープが静かなたたずまいを見せている。

今日、日本中がビオトープ流行で、もはや目新しい存在ではない。取り組み始めて5年はもちろん、10年経過も珍しくはないだろう。しかし、そのほとんどが都市部の失われた自然の再生または創出であって、田舎でという話は寡聞にして知らない。

明川の田んぼビオトープは、田舎の、それも奥里山にあった放棄田を利用したもの。村から出て、長く東京で教鞭を取っていた大坪祥一さんがふる里に帰り、手掘りの用水路に沢水を引き、手塩にかけて育んだ田んぼビオトープも早や15年生に。これはもしかして、日本のビオトープの草分け的存在ではなからうか？

田んぼビオトープの小さな住人たち
水生昆虫 水生植物 両生類 爬虫類
蛾・蝶 ホタル トンボ他

これら生態系の頂点にトンビ。カラスはいない！

7) 藤原の至宝 = 「清澄」なるもの

--手に取れないもの、人智のおよばない世界--

- ・澄んだ空気、抜けるような青空
- ・降るような星空、漆黒の闇
- ・冷涼でおいしく、絶えることのない湧水
- ・静寂な音の世界
- ・ミョウキンとカエルの合唱
- ・見渡す限り一面の銀世界、等々

ペット的自然(ベランダ、お庭) 箱庭的自然(庭園都市公園) 擬木的自然(学校ビオトープなど)の世界、つまり、これら人工的自然の対極にある大自然 = もののけの世界がある。

古道探察：青木沢峠の道

川端英雄

「ひとり学校からの帰り道、うしろから何だか ぴちゃぴちゃ と足音がついてくる。いつまでもついてくる。自分が止まれば、その足音も止まる。もう、怖いなんて！後ろも見ずに走って帰ったもんです。峠道へわれわれコモンズのメンバーを案内しながら、林親男さんが語る。おばけや幽霊が自然と共生しながらしょっちゅう出てきた頃を、沢道を歩きながらなつかしく思い出す。

師入(印川)集落から青木沢峠へ向かう道の入口で親男さん、葉っぱ色に染まったモリアオガエルを何かの葉っぱにくるんでわれわれに披露する。この辺がサンショウウオの棲息地ですよ、とカエルを放ちながら一条の清流水を示す。原(川)集落の水源にもなってきた「桂の清水」とよばれる湧水池だ。よく見るとサヤエンドウを大きくしたような寒天状の袋の中で、小さな生命体が動いている。貴重な命の誕生を多くの人に見てもらいたいけれど、公開すればあっという間に消滅してしまうのは火を見るよりもあきらか。そっと見ることができるのはコモンズ会員の特典だな！今回のコモンズ行で藤原の水の豊かさを感じていただけ、オオサンショウウオの自生であらためて実感する。



やがて、親男さんが青木沢から関が原にあった藤原小学校へ通った峠道へ。いまは通う人もなく道は半ば分厚い落葉で埋もれかかっている。杉が主体の、むかしは民地だったけれどもいまは共有林のかすかに道らしきところを、ゆるやかに登ってゆく。林の中は明るい。あちこちから嬌声

あがる。フタリシズカ、エンレイソウ、ヒロハツリバナ、ヤブデマリ、マムシグサ、オドリコソウ、シオガマ、ラショウモンカズラ、キブシ、ナルコユリ、ハクウンボク、エゴノキ、ホウノキ、コマユミ、ハハソなどなどを指さして。それにしてもコモンズ会員の植物知識(だけではないが)の豊富さに驚く。「川筋三木(カズササボク)は、トチ、カツラ、サワグルミを言うんだよ」と親男さん。親男さん、高田さんがナタ、鎌をふるって道作りを続けるうちに林相が変わってミズナラ林が、さらに上へ行くに従いブナが多くなってきた。樹間が開いて明るさが増す。夜明け、じゃない、頂上は近い。

峠にたどり着く。尾根を抉り取った形で峠道が分水嶺を越え、そして下ってゆく。U字型にえぐられた峠道の向こうの青い空に木々の緑がぬっと突き出ている(このアングルは海老沢さんから拝借)。



誰かが「こんなところに十二神様(ジユウニカミ)が倒れている！」塾長と高田さんが元のかたちに戻そうと精一杯の力をふりしぼる。3個の石組みの1個がどうやら谷底に落ちてしまったらしい。今よりうんとシンプルで敬虔

な心根を持っていた時代、ここまで無事来られたことに感謝し、これから先の安全を祈願したであろうご先祖さまの祈りを受け続けてきた十二神様にも受難のときが来たようだ祈りを忘れたわれわれにはどんな受難が待っているのだろう。

標高889mの峠から落葉を敷きつめたクッション道

を下りてゆく。道幅1メートル余の九十九折(ツラリ)。「荷物を背負った馬が歩きやすいように九十九折にしてあるんだよ」と親男さん。馬力を誇る現代の馬は、山も谷も音蹴立ててまっしぐらだけれど、人・自然・家畜がほどよく共生していた古き良き時代は、もう谷底深く落ちていってしまった。

村の境界を示す庚申塚が現れた。ここで集落に入ろうとする厄を追い返していたのだ。塚の「××× 九月吉日 願主村中」だけが、かろうじて読める。厄払いは村中の願いだったのだ。ミョウキン(イヅルゼミ)の時雨が頭から落ちてくる。足許にはペットボトル、菓子袋が何枚か。木々の間から県道の白いコンクリートが見える。



時折車が行き交う県道をたどって、出発地の師入(モリ)に戻る。師入、原、萩の入りの田んぼ、周囲の芽立つ青い山、蒼い空のコントラスト。胸の中で何か「ウワッ」と解放の雄たけびをあげる。見飽きない。景色に抱かれたい。

師入集落のはずれに立つ小さな堂宇。周囲にある石塔「安永九子年九月 施主 女中七人 二十一夜供養塔」、墓「享和×西八月初春」と1780年から1800年初頭の日付が刻まれている。墓に「初春」の語句を見るのもいとおかし。少しく教養を感じさせる語と思う。

東京の不動産業者が、「97坪 190万円」で眺望絶景の一区画を売りに出していた。早く処分するために雑草も刈ってきれいにしているんだ」と、佐藤さんと名乗る男性が汗みづくで答える。ここに建物ができたら景観がこわれるな!と不安が頭をよぎる。

特別寄稿

夏野深晴

夏野さんは、当塾のフィールド再生・保全事業の支援をしてくれている(財)ダム水源地整備センターのレポーターとして、今回のフィールドスタディに参加されました。とてもチャームングなうえに慧眼の持ち主です。素晴らしいレポートで意欲づけられます。是非、ご精読下さい。(清水)

6月18日(土)

梅雨のさなか、晴れ!といえるような空ではないけれど、まあまあのお天気。新幹線のホームは、長野行きは行列ができていのに、新潟方面はほんのチラホラのお客さん。8:46発のMAX「たにがわ」は連れてってもらうのが申し訳ないようなガラガラでした。越後湯沢までの新幹線はスキーが始まるまではいつもこんな感じだそうです。

メンバーの車に分乗して現地へ出発。利根川源流の一つ、水上温泉郷の最奥部にある藤原地区です。かつてはスキー客で賑わったこの地区は今では28ある民宿も半分しか実質的には営業していない状態です。当然過疎化高齢化で、小中学生あわせて31名。今年の新入生は1名。それも都会から来たぜんそくの子で地元の子供ではありません。



現地の上の原(うえのはら)は町有林の元・入会地(いりあいち)で、なだらかな山の斜面に広がる21ヘクタールを森林塾青水が借り受けています。すでに先発隊が看板をたてて、列車組を待っていました。

この看板は森林塾青水のメンバーでもある地元の木工家、広川さんが作ったものです。そんじょそこらにあるのはひと味違う寺社造りは広川さんの遊び心がたっぷり。墓股(かえるまた)、虹梁(こうりょう)、ウづくり、といった言葉が説明に入ります。柱は樹齢100年のヒバ。看板部分は樹齢80年のヒノキなど

地元水上産の材を使ったこだわりの作品です。ちなみに青森産のヒバはなだらかな地形に生えるため、まっすぐ伸びて大工さん好み。水上産のヒバは急な斜面に生えているため、工芸家が好んで使うとか。メンバーが一人一人ボルトを締めたり釘を打つ儀式をして、設置作業は完了。5年前に結成した森林塾青水の一里塚となる看板です。

上の原は村の人たちが茅葺き用のススキを採取したり炭焼きをしたりして利用してきた入会地(いりあいち)でした。頂上部が台地状になっていてなだらかなため、コクドが200ヘクタールほどを買いとりゴルフ場にしています。コクドの買い残した21ヘクタールが森林塾青水の活動拠点です。すでに半分は森林化し、かろうじて10ヘクタールほどが昔のカヤ場の面影を残すススキ草原となっています。森林化の波はじわじわと押し寄せ、タニウツギが先兵となって辺境を脅かしています(ススキ草原の立場で見ればだけれど)。タニウツギやシラカバを森林化のパイオニアトツリーと呼ぶことをここで知りました。困り者のタニウツギは、そんな事情は私に関係あらへんとピンクのかわいい花をいっぱい咲かせています。

地元の水上工房の広川さんは若い頃関西に出て働き、水上に戻ってきた人です。土産物でも作ろうかというところから木工を始め、注文に応じてありとあらゆるものを作っています。木材には詳しくなったけど、立ち木や森のことは知らないなああと勉強を始めました。そして、ここで清水さんと出会います。企業で働いてきた清水さんは、50代でふと立ち止まった時、企業戦士から「みどりの基金」の仕事に方向転換し、その後もずっと水源の森に関わっています。

かろうじて残された21ヘクタールの上の原を企

業に買いとられないよう、なんとかして守りたいと思っていた広川さんと一生森と関わり続けるためにも自前のフィールドを探していた清水さんと町有林の所有者である水上町の建設農林課の木村さんは3年前、上の原でジグソーパズルの最後の一片がぴたりとはまり、森林塾青水と水上町との管理契約が成立し、以後活動拠点となっています。

入会慣行は長い年月を重ねて作られてきたものです。森や里山を守ってきた入り合いが崩れてしまっている。新しく入会慣行を考えようと議論を重ね、この3月に現代版入会慣行の初版ができました。これは時代に応じてかわっていくもの。みんなの意見を聞きながら、よりよいものにバージョンアップさせていくそうです。機関誌も定期的に出され、「茅風通信」はまもなく15号が出されます。

フィールド活動については、「森林コモンズ村・ふじわら」という講座を開いて参加者をつのって、年に7回行われ、今回の「藤原地区を歩く」もこの一環で里地里山の調査活動に当たります。整備作業としては、上の原で散策路をついたり、水飲み場を作ったり、茅葺き小屋をたてたり、看板を立てたり。茅葺き小屋は、地元の古老に教えてもらいながら茅を葺いたのですが、雪の重みにたえきれずに倒壊してしまったのは残念！



40年間途絶えていた野焼きも始めました。一口に40年というのは簡単だけれど、人口も減り、人の記憶からも薄れていた村の共同作業を森林塾が働きかけ

て再開したのはすごいことです。今まではカヤの業者が勝手に刈って持って行っていったのが、自分達で刈って業者に買ってもらうようになりました。上の原がたとえわずかでも経済価値を持つことは地元にはうれしいことです。昔は月日と決めて一斉にやるというのではなく、それぞれの集落が頃合いを見計らって、都合のいい日に個々に野焼きをしていたそうです。春先に野焼きの終わった土地は邪魔するものもなく、山菜もカヤも思う存分のびられます。野焼きをしたから、いいワラビが出ると人がいっぱい来ています。意外なことに地元の人あまり採らず、外部の人、とりわけ業者はめちゃくちゃにとっていきとか。マナーの悪い人が多いそうで、新しい入会慣行が定着すればいいなと思います。

カヤは国宝や重文などの萱葺き屋根のために需要はあるのに、不足しているの、上の原を元のカヤ場に戻すのは文化面でも経済面でも意味を持つけれど、それより何よりかつて上の原が持っていた入会地としての機能を回復していく過程で、ばらばらになってしまったこの地域がもう一度つながりあい、元気になっていくのではないかと思います。上の原を中心と

した里地里山の保全、活性化の他にも環境教育活動として、都会の学校の環境教育プログラムや不登校の児童達むけにフィールドを開放したり、とさまざまな活動をしています。

今回は藤原地区の地域資源発掘調査活動。都会からの参加者13名が「よそ者」の目で地域の宝をさぐるのが目的です。上の原での看板設置が終わると塾の現地事務所へ移動しました。町からかりあげた元単身用教職員住宅はこういう機会に窓を開け放して、湿気取りをします。中はカビ臭いからみんな外で持参のおにぎりをほうばってランチ。

明川（あけがわ）の集落に入りました。両側を低い山に囲まれた中を棚田状のたんぼが連なり、村の中程にこんもりふくれる塚と一本の豆桜がアクセントに



なっています。遠くにはまだ雪を残す朝日岳も見えるゾ。なんとということもないこの山里の風景、ええなあ！ここは郷土館の大坪義一さんに案内をお願い。郷土館の裏を流れるU字溝が明川の本流と聞いてびっくりしました。土地改良の時にコンクリートになってからは、昔いっばいいいたイワナがいなくなってしまったとか。水源は800mlほど入った山中の「熊穴（くまあな）」といい、名前の示す通り、今でも近辺には熊がいるそうです。豆桜の塚は石垣に囲まれ、古びた数基の石を従えています。かろうじて読めるのは明治30年というのだけ。あとは判読不明だけれど、おそらく江戸期にまで遡る共同墓地だったのでしょ。

山間の空き地は棚田がゆるやかに下っていますが、実際に水をはってお米を栽培しているのは数えるほど。コスモスやミソハギなどの景観作物が植えられたたんぼやあるいは放置されたままのたんぼにはガマやら雑草やらが生え、ミズバショウが咲いているのも見つけました。献上米と書いた立て札が一枚。神社に納めるお米だとかで、遊びでたててあるとのこと。あらら、カエルのたんぼ、トンボのたんぼ、ホタルのたんぼ、の立て札がたってるわ。ええ感じ！これはみんな大坪祥一さんの



たんぼビオトープです。東京で教鞭をとっていた祥一さんが退職して平成2年に故郷に帰ってきたとき、あまりの田畑の荒廃に心を痛め、父君

といっしょに手掘りの用水路へ沢水をひいてたんぼに水を張りはじめました。昔は農薬を使わなかったから、ドジョウもたくさんいたし、蛍、赤とんぼもすごかったとか。回復のきざしは5年目ぐらいから始まり、

今の状態になるのに12~3年かかったそうです。トンボのたんぼでは本当に糸のような細っこい糸トンボがいました。背筋のブルーがくっきりと鮮やか。水がきれいになってから、一番最後に現れるイモリもようやくそろいました。隣接するたんぼにはこぶし大のモリアオガエルの卵が。

空を見上げた時、ちょうど鳶を見つけました。そうだよなあ、たんぼがあって鳶が舞って、それが田舎の風景だよなあ。

水温が冷たいためか、アメリカザリガニの侵入を受けていないのは幸いなことです。また景観補助事業から出る若干の補助金により、村の人たちが電柵の設置や撤去、U字溝の掃除など、年に十数回、共同作業をするようになって、連帯感や結束ができてきたという祥一さんの話に村の再生の希望を見たいと思います。

義一さんの説明を受けながら、村の探検が続きます。電柵(電気柵)で囲まれた畑は9割の補助金が出るようになってから、あちこちに現れました。ここでは猿から作物を守らなければなりません。最新の村の風物です。

ヨシが栽培されているところを通った時、ん？ヨシって沼や湖の岸边に生えているんでないの？と思いましたが、沢水が流れているところでした。ヨシは茅葺き屋根の下地として強度を出すために使うとか。茅葺き屋根にトタンをかぶせた榛名神社の中をのぞいた時、確かに屋根の一番下にはヨシが見えました。こういうところが現地学習の強いところ。説明が実物とつながって、ふやけた脳みそを心地よく刺激してくれます。

榛名神社の手前には50トンの水を溜める貯水槽があり、ここから11の各戸に水が配られます。年に7500円を納めれば使い放題。おいしい山のわき水を水道に使える村の人たちは幸せ。お社の後ろの山を登っていくと奥社跡があります。人口も減り、雪で壊れたお社を守れなかったのでしょうか。かつてここに奥宮があったことを示す小さな石祠がぼつんと立ち、お社あとの小さな空き地を囲むようにレンゲツツジが数本、橙色の花をつけていました。土地の人が田植エツツジと呼ぶこの花は奥宮にお参りに来た人たちの



残り香のようでした。朽ち果てたお社の屋根や柱の横に、ギンリョウソウがかたまりを見つけるとみんな大喜び。「これ、奥宮の妖精だよ」

2件ある茅葺き屋根の家は、一軒は沼田在住で不在。もう一軒はトタンで覆っていたのだけれど、去年の台風でトタンが飛んでしまっていてそのままになっている状態。これも村の現状です。家々の前には裏山からの沢水を引いて、井堰が作っており、今も現役。炊事はもちろん、農機具を洗ったり、除雪した雪を溶かしたりします。これも地域資源だ！道路の真ん中にお相撲

さんの親指ぐらいのヒミズ(モグラ科)の死体が。あらあら、かわいそう。

学校やお寺に行くときや寄り合いがあるたびに村人が通ったという寺山街道をたずねました。入り口には道祖神と小さな社があります。そこから少し登ったところの石仏と石碑は倒れていました。たてることはできなかったけれど、お顔を空に向けてあげられました。草むした地面に顔を突っ伏していたら、息苦しいもんね。山道は背の低い木が生えていて、もう道はすっかり分からなくなっているの、大坪さんの先導がなければとても行けません。ところどころで出会う石仏、石碑だけが人の通った痕跡を残しています。寂しい山の中、刻まれた字も読めなくなったり、倒れたりしている石碑を前にして、かつてここを通った村人とその生活を偲びました。

夜の宿は葉留日野山荘。廃校になった小学校を潰すには忍びないと、山仲間がお金を出し合って、手を加えたり、修繕したりして宿にしたところです。校庭は駐車場。校舎の前にそびえる2本のメタセコイアは昭和天皇のご成婚を記念して植樹されたもの。中庭はモリアオガエルの生息地で白い泡の塊の卵がありました。多くの方が学んだ学校が機能は変わったとはいえ、宿として生きていることがうれしい。昨年30周年を記念して、宿の主人一家に感謝を捧げるパーティが開かれたそうです。

地元産の食材を使った食事はおいし〜い！キハダ、ジュウヤク、などの薬茶も数種類おいてあります。濃い黄色のキハダ茶は思わず顔をしかめるほど渋いけれど、あとは飲みやすい。一度飲んだくらいでは効果は表れないでしょうが、全種類を飲みました。

温泉は弱アルカリ性低張性高温泉。なんのことが分からないけれど、無味無色無臭のとろんとした柔らかなお湯です。評判の高い美人の湯の効果はあったかな？

食事の後はミーティング。2班に別れて観察した成果をまとめ、情報を共有します。しっかりポイントを押さえて見てるなあ、と感心することしきりでした。

6月19日(日)

昨日宿に入って温泉に入っているころから、激しい雨が降り、あ〜、明日は雨かあ〜、と思っていましたが、翌日は雨も上がりました。ついてるぞ。

今日は林親男さんの案内で、師入(もろいり)~青木沢集落への古道を歩きます。その前にモリアオガエルの卵があるからと、たんぼへ見にいきました。次にサンショウウオの卵。どんなやろ！？車の通る道路脇からちょっと入ったひら地に「桂の清水」と呼ばれる水が湧いて、ちいさ〜な流れを作っています。卵の大きさと形は太めの万年筆ぐらいで透明



なゼリー状。中にサンショウウオの赤ちゃんらしきものが何匹も動いています。グリーンピースのさやの中のある豆が動くのを想像すればいいかな。サンショウウオの卵に出くわせるなんて、なんて僥倖。みんな興味深く眺めたり、必死で写真におさめたり大騒ぎでした。

いよいよ昔の道を求めて山に入ります。親男さんも子供の頃通った道。やはりここも案内してもらわなければ、ただ山の斜面をよじ上るだけでさっぱり分からないでしょう。山肌近くが雑然と低木で覆われたところを切り開きながら進むと、整然とブナなどの大きな木の林になり、木の下はすっきりしました。ここからは山道らしきものが現れ、ブナやミズナラなどの林の斜面を山道から見上げる景色はすばらしい。う～ん、この山いただき～い！という声が聞こえました。ブナの大木が倒れた後は明るい光が差し、そこにまた小さな木が生えています。これぞ森の世代交代の現場。山の学校では多くのことが実地に学べます。それはやみくもな暗記ではないから、すつんと体に落ちて忘れな

い。

峠に差し掛かったところで一服。目印になるような松の木が道の両脇にありました。「峰松沢杉」といって、松の木のあるところは人が歩けるところなんだよ。と教えてくれるメンバーあり。「川筋三木(さんぼく)：トチ、カツラ、サワグルミ」家を建てる時は「前畑裏山」というのも教えてもらったナ。かつての村人たちもここでひと休みした峠。松の木の根元には石碑が倒れています。もひとつあるはずの石がないのは雪で流されたのでしょうか。ここで全員の記念撮影をして山を下りました。



再び青水の事務所に戻ったの昼食は地元の気まま屋のおにぎり。山菜の煮物がいっぱい食べられてみんなニコニコです。地元でとれたんだからなんとって、一

番うまい！

昼食の後は林明夫さんの指導で、次回のために笹の葉をとって笹餅を作る練習をしました。最後は上の原に戻って、ゴミ拾い。2日間、山でも里でもずっとエゾハルゼミの歓迎を受けました。ありがとさんね。

山間に散らばる集落と集落を結ぶ道、入会地に通じる道、寺に行く道、学校に通う道、生活の小さな道が今は山の中に埋もれています。こういった古道をエコトレイルとしてもう一度復活させたい。都会から滞在型のお客を呼んで、ここに地域丸ごと博物館ができな

いものか。村の歴史や文化を自分で見つけたり、古道を歩いたりしてゆっくりのんびり過ごせる山里にしたい。ここで都会の人と田舎の人が挨拶を交わしたり、話をしたりできたらすばらしいではないか。今までの活動の中から、このような構想が出来上がってきたことがよく理解できました。

自前のフィールドを持ったことにより、森林塾青水は地元の人と一緒にあって、ここに新しく自分達のふるさとを作ろうとしているように見えます。何度も地元へ足を運び、地域調査や入会地の整備、野焼きなどを通じて、村の人たちとのつながりもできています。それぞれ違う分野で高いレベルの専門性を備えたスタッフが核になり、それが磁場になって人を引き寄せています。

活動に参加した一人が、森林塾は森林浴だけでなく、じんりんよく(人林浴?)がすばらしいと言った言葉を実感しています。山菜に詳しく、大きなお鍋持参で山菜をいっぱいにとってすぐに煮ていた人、花や木が大好きな人、説明より何より、目の前の生き物や草や花に懸命にカメラにおさめていた人、絶え間なくだじゃれで周りを笑わせる人、実際に環境活動に携わってきた人、そうでない人、いろいろ、さまざま。共同作業を通じた地元、メンバー同士の人林浴はなかなか刺激的です。

東京都の水不足が叫ばれるとき、いつも出てくる「東京都の水瓶である利根川上流部」。今回自分が行ってみて初めて、そうか、ここだったのか、と脳の回線がつながりました。東京都の水を供給する奥利根の水源地の森。蛇口をひねれば水が出てくるのが当たり前前の生活を送っているけれど、上流部の環境、そこに暮らす人々にももっと関心を持たなければいけないと思いました。

水上の山々は90%が天然林。人工林は10%だけ。「大都市の近くにこんなに天然の自然があるところは世界に例がないよ」というよさをもっと地元の人自身、知ることが大切です。日本の山村の原風景が残っているこの地区に「都会的なものはいらぬ、田舎の本物を作ろう！」こういった意識を持てるのは、田舎からいったん外に出て戻った人が持てる自信なのでしょう。地元の熱意ある人と、外部からの働きかけが合体する時、大きな波が生まれます。中流、下流の人にはもっと上流部を訪ねよう。村の人たちは、ほら、山里の生活ってこんなだよ、大仰なものは特にないけれど、自然のサイクルの中で暮らすって、こんなだよ、これもなかなかいいでしょ、山里によろこそ、とありのままの村の生活の中に迎え入れてくれればいいナ。

奥利根の山里には人と自然が長い間かけて作ってきたゆるやかな調和があります。村人が自然に寄り添って生きる中でつちかかってきた知恵と技術があります。こうした伝統を掘り起こし、次の世代にもつなげていこうという森林塾青水の努力の中に、藤原の地、人々に対する愛情と敬意を感じました。更なる発展を願ってやみません。(完)

葉留日野山荘の思い出

川上ゆう子・高橋志津子

6月18日～19日開催の第3回フィールドスタディで利用させていただいた葉留日野山荘の思い出を川上ゆう子さんと高橋志津子さんに語ってもらいました。



川上さん；葉留日野山荘への思い

廃校を再利用されたというこの山荘は、小学生の頃に学んだ木造校舎をなつかしく思い出させてくれました。就寝時、階上からの物音が響き古さを感じましたが、部屋は広々としてゆっくりくつろげる空間がそこにはありました。そして又、その空間は食堂で最も感じられました。天井が高く、かつては講堂であったろうスペース。最適な場所となりましたネ。加えて、お料理が旬で地産の山野草。生産地の案内板などの心配りもあり、おおいに堪能できました。二階の学級を探検せずに帰ってしまった悔いは残るものの、温泉にもつかり大満足のお宿でした。

高橋さん；泉さん、ありがとうございました

食事は藤原の山の幸がいっぱいで、私達のためのプラスワンもあり大感謝。メニュー表が各テーブルに配られている点も良かったです。19日の朝食後、急に頼んだコーヒーと紅茶に対して、笑顔で応じてくれた泉さん。申し訳なく思ったと同時に大変、嬉しかったです！！お風呂も、あふれる天然温泉と露天風呂さながらの景色で大満足でした。



(写真：三好正子)

麗澤中「奥根水源の森フィールドワーク」報告

湯本信康

7月8日(金)奥根水源の森と青水フィールドにおいて、麗澤中学校1年生119名を受入れて、「奥根水源の森フィールドワーク」が行われました。4から始められた「自分(ゆめ)プロジェクト」の一環として、5月21日学園内での「樹木観察」に続いて行われたものです。全体のメインテーマとして「水源の森(ブナ林、青水の森)ってどんなところ！」をかか

げ、水源の森では「五感を働かせ、ブナ林でさまざまなことを観て、感じてみよう」、青水の森では「実習体験：人里に近い自然・森ってどんなところ？」とそれぞれのテーマのもとで実施されました。また、充実したフィールドワークにするために、より効果的に自然を体験するための8つの事前学習テーマを設けて、予備知識をもって臨んだことが特徴的でした。

119名の生徒をAグループ(59名)、Bグループ(60名)に分けて、「奥根水源の森」と「青水の森」とを、午前・午後の交互に実施しました。

奥根水源の森

午前Aグループ、午後Bグループ

3つのコースに分かれ、それぞれ2名のインストラクターが担当して観察しました。

[こもれびのみちコース] 湯本信康・高橋 泉

[森林浴のみちコース] 高野史郎・中島 武

[ブナの森のみちコース] 浅川 潔・広川義直

森林塾青水フィールド

午前Bグループ、午後Aグループ

カヤ編み体験1・2班、雲越家住宅資料館見学1・2班の4つの班に分け、フィールド散策の後、それぞれの班に分かれてカヤ編み、資料館の見学をしました。フィールド散策 カヤ編1班：富田良子・林 三郎
カヤ編2班：海老沢秀夫・林 包芳

資料館1班：清水英毅・林 久

資料館2班：多葉田五男・林 親男

カヤ編み カヤ編1班：富田良子・林 三郎・三好正子・宮奥弘子

カヤ編2班：海老沢秀夫・林包芳・岡田伊佐子

雲越家住宅資料館 案内：福島貴美子(教育委員会)

資料館1班：清水英毅・林 久

資料館2班：多葉田五男・林親男

今回新たにインストラクターを務めていただいた、地元の林三郎、林包芳、林久、東京の宮奥弘子、森林塾青水の多葉田五男、三好正子の皆さんに感謝いたします。



第4回フィールドスタディは一日目が、夏の終わりの上の原でフィールド整備作業。ススキ草原の侵入樹木を切ります。二日目は、藤原地区のランドマークである雨呼山を案内人クラブのガイドで歩きます。

ところ：群馬県水上町藤原地区

集合：上越新幹線「上毛高原駅」・初日の午前10時20分

電車：Maxたにがわ435号 東京駅8時48分 大宮駅9時14分 上毛高原駅10時15分

宿泊：「民宿山椒」群馬県利根郡水上町藤原3556-2 電話0278-75-2712

参加費：7,800円(1泊2食の宿泊費、保険代、2日目昼食代など)その他、集合駅までの交通費が必要
【第1日目】9月3日(土)

時刻	内容	場所	指導
10:30	上毛高原駅集合		
11:30	現地事務所へ ・【ちまきづくり】モチ米を笹の葉で包み、ゆでる	現地事務所	林明男
12:00	昼食 弁当持参	現地事務所	
14:00	【ススキ草原の侵入樹木を切る】 ・切った木を「尺6寸」の薪にして、現地に倒れないようにしっかりと積む	上ノ原	池田登 海老沢秀夫
17:00	民宿へ	山椒	
18:00	夕食	山椒	
19:30	地元と地域資源調査について討論会	山椒	

【第2日目】9月4日(日)

7:00	朝食	山椒	山椒
8:30	雨呼山ハイキング ・藤原地区のランドマーク的な山「雨呼山(あまよびやま)」を、藤原案内人クラブの解説・ガイドで歩く	雨呼山	藤原案内人クラブ
12:00	昼食 アンケート回収	現地事務所	八雲
13:00	上の原のゴミ拾い	上ノ原	
14:00	解散		
15:32	たにがわ446(上毛高原駅)		

問合せ・申込み：「森林塾青水」事務局 コミュニティ・デザイン内(浅川潔)

ファクス03-5474-0847、E-mail: sinrinjyuku@fiberbit.net

締め切りは8月24日

編集後記 - 塾長のつぶやき -

寺社建築様式を取り入れた総合案内看板。「ゴミのポイ捨てやら基本的なマナー、ルールなど、注意喚起の役割をこの看板が少しでも担えたら、という思いを込めて作りました」と広川さん。胸にジンときた。水汲みや山菜採り、きのこ狩りに来られる大勢の皆さんに広川さんの、そして我々の思いが少しでも伝わって欲しい、とつくづく思った。 そうだ、この看板には皆の思いが込められているんだ。これは、森林コモンズ村・ふじわらの利用ルール作りの原点=メインフラッグなのだ!

親男さんが小学校に通った青木沢峠の道。「桂の清水」の水溜りではサンショウオの産卵が見られた。明川の義一さんが通った寺山街道の道筋には、昔を偲ばせる石仏が何体も横たわっていた。まことに詩情豊かなロマンの香り高き古道深訪だった。聞けば、上の原(の茅場)から尾根つたいに各集落に下通する道もあるという。古道の散策と普請によるフットパス=エコ・トレール作り。地元古老の皆さんのお力をかりながら、藤原中学の生徒さん達とコ・ワーク出来ないものか。雲越先生、総合学習「藤原学」のテーマの一つに如何ですか?

峠道やがてかそけき水の音

某紙「いきいきライフ」に、山の緑を守りたいシニア層のボランティアが増えている、とあった。又、某紙「ゆとりライフ」には、環境への関心の高まりに伴い、水源林散策や収穫体験などを内容としたエコツアーやグリーンツーリズムが盛ん、と。他方で、二年後の平成19年には団塊世代が定年年齢に突入、以後大量に産業界から放出されてくる。

自ずと、首都圏・団塊シニア~利根川流域・エコツアー~みなかみ・里山保全~森林コモンズ村ふじわら・エコミュージアム、といったキ・ワードが浮かんでくる。昨年来、取り組んできた「地域資源活用調査事業」の取りまとめ期限を今月末に控えた今こそ、こうした時代のニーズを踏まえつつプロジェクトチーム・メンバーの衆知を結集していきたいもの。

ひまわり
向日葵や一生懸命が取り柄の娘

(青)